

「支え合う世の中に」

選挙 de 談議

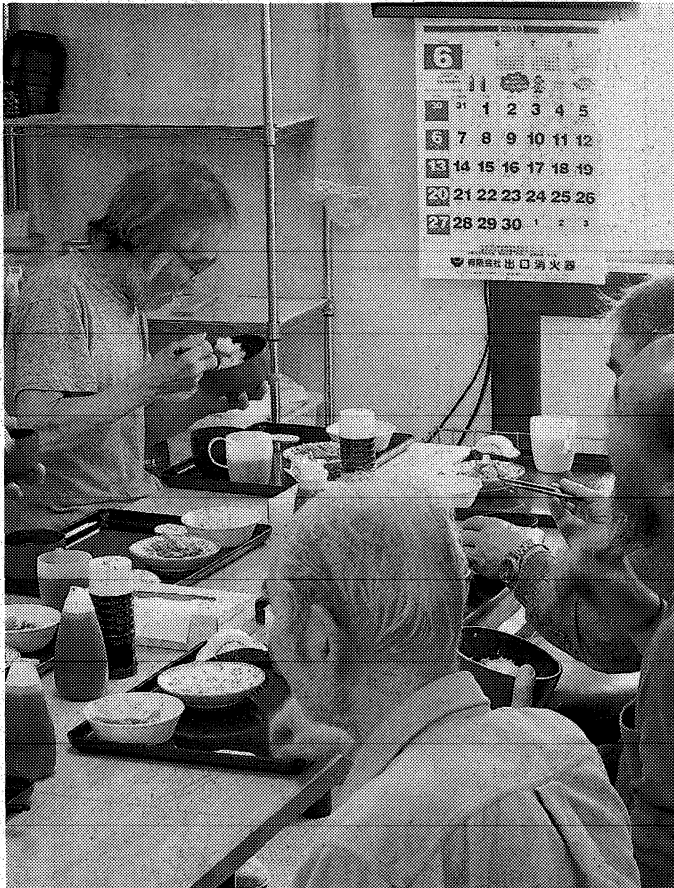
4

終の棲家

○法人「ふるさと会」(台東区)が運営する共同住宅「ふるさと寿々喜屋ハウス」で、お年寄りたちが食卓を囲んでいる。

高齢者のための住宅「たまゆら」の火災を受け、厚生労働省は大都市圏に限り、低所得者向け軽費老人ホームの面積基準を緩和した。入居待ちが全国で約42万人にのぼる特別養護老人ホーム(特養)についても、開設にあたっての量的規制を撤廃し、地域の需要に応じて自治体が自由に整備できるよう検討を始めている。

建設中の東京スカイツリーにほど近い墨田区本所。ホームレスの自立を支援するN.P.



「ふるさと寿々喜屋ハウス」で食卓を囲む入居者たち＝墨田区本所2丁目

20ある居室は3畳ほど。広くはないが、ベッドとテレビがある。3度の食事は給食センターから届くおかずは湯気の立つご飯とみそ汁がつく。「お茶、冷たいのとあったかいの、どっちにする？」スタッフがひとり1人に尋

ねる。服薬が必要な人には、1回分の薬を手渡す。オープンは今月2月。現在18人いる入居者は、墨田区福祉事務所の紹介で入居するまで赤の他人同士だった。いずれも身寄りがなく、病気や体の衰えで一人暮らしが難しい生活保護受給者だ。「誰だって住み慣れた土地で最期まで暮らしたい。でも、そんな願いも都会じゃめったにかなわない」建物のオーナー、鈴木隆司

さん(53)が言う。群馬県渋川市で昨年3月に起きた「静養ホームたまゆら」の火災では、10人の犠牲者の中に墨田区をはじめとする都内の生活保護受給者たちがいた。生活に困窮する人だけではない。そもそも、この東京で「終の棲家」を手にするのは、ほんの一握りの幸運な人だけではないか? 鈴木さんは自らの経験からそう思う。

「ふるさと寿々喜屋ハウス」はもともと、鈴木さんの父親(89)が戦後間もなく開いたそば店「寿々喜屋」だった。鈴木さんは今も南に徒歩7分ほど離れた場所です。店「寿々喜屋」を営むが、50歳になる前、一家の様子が急変した。父の認知症が進み、母(89)は脳血栓で倒れた。やっと見つけた埼玉県内の老人ホームに両親を入れたが、母は寝かしつけられたきり、「いつの間にか、車イスの生活になった」再び探し回って別の老人ホームへ入れた。入院が必要にな

った年の出費は1千万円を超えた。4人いる子どもの教育費もかさみ、経済的にも行き詰まった。地価の高い東京では、高齢者施設を地域に抱えたくても、建てる土地がない。「箱モノ中心から、訪問診療や介護など、様々な社会資源で支え合う仕組みに転換することが求められている」そう話すのは、ふるさと会の代表理事、佐久間裕章さんだ。墨田、台東、荒川の各区で廃業したホテルや老朽アパートを借り上げて改装し、「支援付き住宅」と呼ぶ24時間の見守りのある共同住宅にする活動を手がけている。

「ふるさと寿々喜屋ハウス」もその一つ。愛着はあるが、もう両親は住むことができない本所の家を、鈴木さんはふるさと会に貸した。「いつになっても地域で暮らせる。年寄りたちに、そんな心のよりどころを与えることは、街の魅力にもなる」鈴木さんはそんな政策を掲げる政党を探している。しかし、今はまだ見あたらない。(鈴木淑子)